

## 街を守り、次世代へつなぐ

鈴木 文華

今年、私が衝撃を受けた税に関するニュースが二つある。一つは京都市が財政破綻の危機に直面しているということ。借金残高は八月現在で八千六百億円にも上るといふ。もう一つは、埼玉県川口市の税収が今年度当初の税収見込みより、大幅に増収するという。なんと三十四億円も上回り、計九百四十三億円になるといふ。

実は私は、一年前までれっきとした京都市民だった。しかし、父の転勤で引越しをし、今は川口市民だ。私にとって最も身近な二つの市があまりにも真逆の状態になっていることに、私は複雑な気持ちでいる。特に慣れ親しみ、友達も多くいる京都市の財政危機のニュースは、衝撃以外の何物でもない。

京都市は世界的にも有名な観光都市である。「京都は観光客に優しく、住民に冷たい。」と友達と笑うこともあったが、京都が観光を収入源にしていることは小学生でも知っており、「財政難」という考えは浮かばなかった。

財政危機の大きな原因は市営地下鉄で、ずっと赤字経営が続いていたそう。にもかかわらず、京都市は手厚い行政サービスを続け、「公債償還基金」という将来の借金返済のために、積み立てていた基金にも手を付けていた。五年後には基金が底をつく見込みで、このままでは京都市は「財政再生団体」になってしまうのだ。すでに人口の流出は始まっていて、京都市は負のスパイラルの中にいる。

一方、川口市は「本当に住みやすい街大賞」の二年連続受賞が後押しし、今、人口が急激に増えている。そのおかげで予想外の税収アップにつながった。住民サービスは今後、さらに私たち市民に充実した生活をもたらす、川口市にはさらに人が集まるに違いない。

私は知らないうちに財政難の市から、豊かな税収のある市に引越ししただけだ。しかし、この偶然が私の生活を変えてしまうのだ。私が納税する年になっても、おそらく川口市の豊かさは変わらず、私は良質なサービスを受けながら生活できるだろう。しかし、京都の友達は近い将来、自分の納めた税金が市の借金へと消えていく可能性があるのだ。

今の私は税金を納める立場ではないが、自分の住む街の財政状態を知らなければならぬのだと、今回の件で学んだ。大人が納めてくれた税金がどのように使われ、住んでいる人々の生活にどう関わっているのか。そこに無駄はないのか、将来像が見えている使い方なのか、と。同時に、京都市が税金の使い方を間違えなければ、このような危機的な状況になる前に修正もできたのにと悔しく思う。

税金の使い方は、住む街の未来を担う私たちに確実にに関わり、私たちが背負う現実なのだ。だからこそ、私は税金の使い方を決める選挙にもしっかりと向き合い、関心をもって臨みたい。そして、税の正しい使い方を学んだり選んだりし、胸を張って次世代へとつなぐことができる大人になりたいと思う。